

服部(関学)・石崎(京大)・林(歯大)さんと現在も各大学で活躍している優秀な人々が多くあります。

最近はお野さんにとても熱心に、毎日のように指導していただき居りますが、今年には学生の部員数が少ないので、一寸寂しい感じがします。十余年間の先輩方の努力によって築き上げられた立派な伝統を傷つけまいように、いや、ますます「発展・繁栄」を望むように現在の在学中の人々の努力を望むと共に、高津クラブ(O.B.O.G)の隆盛をお祈り致します。

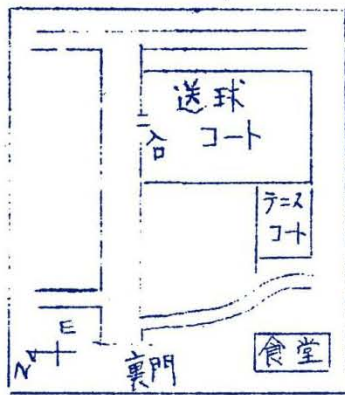


# 送球

小西 英博

ドリブル……パス……ドリブル……シュート……グラウンドのはしからはしへ、一つのボールを追ってひたはしる。頭にはボールと敵味方の動き以外は何もない。体力と技術のあらうん限りを出しつくしての何十分間かの緊張と躍動とは青年の心をひきつけずにはおかない。ハンドボールクラブの依頼でこの文を草し一つ、心はその頃のグラウンドを走りまわっている私の姿を追っているのを感じる。その頃——昭和十四年——は「送球」と言っていた。今日のハンドボールが日本へはいつてきてまだ間のない頃であった。送球の祖国ドイツからチームが来日して親善試合をしたりしていた。当時の高津中学校は、時の校長羽生(はにゅう)隆先生の教育方針に副って、対外試合をする運動部は全くなく、そのかわり全校生徒が、バスケットボール、バレーボール、フットボール(サッカー)、テニス、送球という五つの種目のどれかに属して週一回、所定の曜日の放課後運動をするることになった。先生方もその中のどれかかの指導に当たられた。一年は月曜日、

二年は火曜日といふふうには学年ごとには曜日が決められ、五十分間、練習したり試合をしたりしたものだ。サッカーは現在のグラウンド、バレーはグラウンドの北寄りのコート、バスケットは体育館、テニスは食堂の東側、そして送球はその東側でおこなった。食堂の東側から、真田山公園西側を走る南北の道路にかけて、第二運動場があり、それが我々の送球コートであった。決められた日の第六時限がすむと、せいぜい体操の服装に着がえ、通学服を体操袋に入れて北館のグラウンドに面した壁につくられた袋かけに体操袋をかけ、当番がボールを持って全員第二運動場に集合、点呼、準備体操の後、球技にうつるわけである。クラブではなく、すべて先生の指導によるものであるから、現在の諸君のように、自主的に練習計画をたてて練習し、練習が終わってからこの語らいにクラブ員の親しさが密になるといふこととはないが、それにしても、チームメイトとしての親近感が全然ないわけではなかつた。



た。当時は五月に、花園ラグビー場で運動会があった。これは、所謂運動会である。その後十月の末まで、先に書いたような方法で球技を練習し、十一月の、たしか一、二、三の三日間だ、たと記憶するが校内球技大会が行われ、勿論授業なし、トーナメントでフラスコ対抗試合により優勝を決めた。送球には送球、バスケットにはバスケットと、それぞれに応援歌があり、試合当日、開始前と終了後に全員で歌い氣勢をあげたものだ。その頃は一学年六クラスであつて、一位から六位まで、順位によつて得点が与えられ、五つの部門の得点を合計して総合優勝を決めた。クラス全員がどの部門かに必ず属していたせいもあつて、関心が強く、大会期間中は相当に興奮したものである。府立中学校も大部分は運動部を持ち、対外試合をし、全国大会等にも出場したりして、いた中であつて、高津のこのやり方は特殊なものであつた。新聞のスポーツ欄に名の出ることもなく、又、全員が選手だ、だから、技術的にはさう高度なものも望むべくもなかつたが、ともするとかたよりがちな運動に、全員が参加するといふこの方法は、それ自体一つの教育的見識をあらわすもので、相当高く評価されて然るべきも



のと思う。又、時代は徐々に、そして後には急速に軍国主義化、国粹主義化し、外国の球技などするひまがあれは日本の武道をやれ、外国の球技をする奴は、外国かぶれの非国民であるというふうだ、今から思えば滑稽ともみえ、さちがいじみてゐるとさと思える風潮の中にあつて、昭和十八年頃までこのような球技をさせてくれた学校の態度には、顧みて無条件に感謝の念を持つ。母校卒業後の進学先でこのことを話したら、全国各地から来ていた友人たちは殆んど皆おどろきの声を発したほどであつた。又しぶりに回顧して、今さらのようになつてしまふを覚える。今グラウンドを走りまわつてゐる諸君も、いつかは私のように、今をふりかえつてなつかしさをおぼえることである。その時期が充実したものであればあるだけ、ふりがえつた時のなつかしさは大きく深い。今を充実したまえ。ボールを追つて走る諸君の姿をみて、そのみながる若さ力強さに唇のはころびを感じる。時代の明日をになう諸君のエネルギーに大きく期待する。

自分のシニョトで優勝を決めたうれしさは、いつになつても忘れられない、ひそかな喜びであり、ささやかな誇りでもある。

ハンドボールをおま  
り(全然?)御存じ  
でない校長先生の為  
に、またハンドボ  
ルをやつていながら  
その起源や歴史を御  
存じでない方々の為  
に「ハンドボール略  
史」を書いてみたい  
と思ひます。

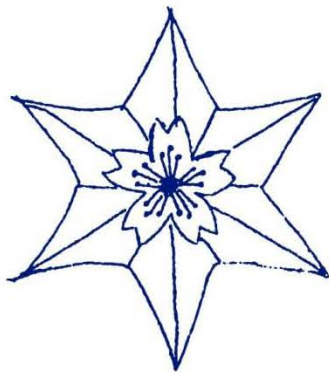
## ハンドボール略史

ハンドボールの起源は古代ギリシア、ローマ時代からである。当時ギリシアではハ  
ルパストーン、ハルパストウリと称するゲ  
ムがあり、ボールを奪い合つて所定の位  
置に投げ込むゲームであつた。これが今日  
のサッカー、ラグビー、ハンドボールの始  
まりと考へられる。ハンドボールの形をし  
た球技は、一九五一年トリアバル(門球)と  
いう名称でドイツで女子体育興隆の意図  
の下に考案され、欧州諸国に普及するに及  
んで、男子にも次第に愛好されるに至つた。  
現在のハンドボールはドイツのカール・ゼ



レッによつて創案された。そして一九二〇  
 年にはベルリン体操連盟が正式のハンドボ  
 ールの規則を制定した。そして翌二十一年に  
 はこの規則によつて、全ドイツハンドボー  
 ル選手権大会がハノーバで挙行された。こ  
 れがハンドボール競技会の最初である。つ  
 いで一九三六年のベルリンオリンピック大  
 会には正式種目として加入されドイツが優  
 勝した。

日本では一九二二(大正十一年)当時の東  
 京高師(教育大)教授の大谷武一氏がドイ  
 ツから紹介し、その後新教材として学校体  
 操要目として採用された。スポーツとして  
 は一九三七(昭和十二年)第一回関東ハンド  
 ボール選手権が行なわれた。太平洋戦争中  
 は、戦力即ちスポーツという思潮が当時台  
 頭し、平和であるべきスポーツにも、その  
 実施の制限があった事は悲しむべき事であ  
 った。それでもハンドボールは女子のスポ  
 ーツとして制限外におかれたが曲りなりに  
 も継続していた程度で、思うほどに進展し  
 ないうちに終戦となった。一九四六(昭和  
 二十一年)の春には早くも東西対抗を行い秋は  
 復活第一回国民体育大会が大阪を中心に  
 なわれたが、ハンドボールも各種目別の東  
 西対抗で参加した。以後年々益々盛んとなつて  
 いる。しかし、ハンドボールはまだ一



般によく認識されていない。野球のごとく  
 庭球のごとく多くの人の手に親しまれてい  
 ない。この事実を否定し得る時が一日も早  
 く来るようにと我々は願つてゐる。

さて、我が高津ハンドボール部も創立以  
 来十余年を数え、その活動も、常に活発に  
 してなごやか、社会に大学にと有能な人物  
 を送り出して益々発展の途上にある。そこ  
 で、現役諸君に自らの立場を自覚し  
 、今後のクラブ発展のため、全力を  
 傾注してもらう意図をもち、OBの  
 思い出話などを綴つて頂いた。